
私の命日

たろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の命日

【コード】

N0900A

【作者名】

たろう

【あらすじ】

『私が自分の余命を知ったのは、思っていたよりもずっと早い時期のことだった。』なんでもない高校生・生田綾香はある日突然死を宣告された・・・

宣告

私が自分の余命を知ったのは、思っていたよりもずっと早い時期のことだった。

当時の私はまだ高校生で、自分の死ぬ姿なんて考えようともしなかった。

どうしようもないほど辛くて苦しい時なんか

「死にたい」

と思うことはあっても、それは死を理解していたわけではなく、ただその場しのぎの

「逃げたい」

を少しかっこよく言い換えたようなものだった。

「逃げる」

より

「死ぬ」

の方が、

「自分はこんなになるまで耐えたんだ」

という自己満足が得られるものなのだ。

だが、私ははじめ、自分の余命を知らされても少しも動揺しなかった。

当然だろう。

その宣告は病気や怪我を基にしたものではなく、私がなんといわれなくても絶対に信じようとしなかった占いというものだったのだから。

占い

私はその日、親友のユキに連れられてよく当たると評判の占いの店に行った。

店には長い行列ができており、私達は2時間並んでようやく順番が回ってきた。

まず、占いが大好きなユキから占いの師と一緒に暗い部屋に入っていた。

私はその間店内を見回した。

壁や天井にはうさん臭いお守りやらお札が貼られていた。

私が占いを信じないのにはきちんとしたわけがある。

まず、占いはどうにでも捕えられるあいまいな言い方しかない。

そして占いの師はそれを話術でさらにうまくごまかしているものだ。

例えば、私のような女子高生が占ってもらったところを考えよう。まず占いの師は尋ねる。

「あら、あなた最近お父さんに一大事があったわね」

決して

「何があったの」

とは聞かない。

あくまで自分は神のような存在でなくてはならない。

神はなんでも知っているものだ。

女子高生は答える。

「そうなんです。この前財布を落としたとかで大騒ぎしました。」

占いの師は、しめた、と思う。

「最近」

や

「一大事」

なんて、聞き手によって捕え方はさまざまだ。

3日前風邪をひいたことだと捕えるかもしれないし、2週間前の宝くじ当選だと捕えるかもしれないし、もしかすると一年前の交通事故故なんて考える人もいるかもしれない。

父親にそういったことが全くない人なんてそうそういるものじゃない。

占い師は続ける。

「そうね、あなたのまわりは今金運が悪いから気を付けなさい。でもあなたの悩みはそれではないですね」

今どきの女子高生が父親の財布でそれほど悩むなんて考えにくい。

女子高生は答える。

「実はクラスの男子に恋をして……」

女子高生は詳細を話し、占い師は最後にこう言う。

「その男子とあなたの縁は薄いです。しかし、それは今現在の話であって、これからどうなるかはあなた次第です。あなたがその男子によせる想いが強ければおのずと縁は深くなるでしょう」

女子高生から見れば、父親の財布のことや悩みを見透かされ、悩みまで解決してくれた、そんな風に思えるだろうが、占い師は何一つ大したことはしていないのだ。

だが私は占いを信じる人をばかにしたり見下すつもりはない。

実際、占い大好きのユキは私の一番の親友である。

ついに私の番がやってきた。

私はあまり気が進まないながらも占い師のいる暗い部屋に入った。と、そこで名案が頭に浮かんだ。

この占い師を困らせてやろう

私はさっそく実行に移した。

占い師と向かいあった席に座ると、彼女はすぐ話しはじめた。

「あなたは最近学校で変わったことがありましたね」

そらきた。私はこの質問にでっちあげの話を返した。

「そうなんです。今朝も上履きがなくなっていました。毎日毎日、私の持ち物が消えていくんです」

我ながら苦しむ少女の芝居はうまくできたと思う。占い師は

「それが悩みなんです。わかりました」

といって、目を閉じて何かをぶつぶつ言い始めた。どうせ目を開けてから

「それはあなたの中の暗い心が呼んだ心霊現象です」

なんて言うのだろう。はつきり

「いじめですよ」

なんて言わないだろうな。と私は予想をたてた。

だが、しばらくして目を開けた占い師はなかなか言葉を発しようとし
ない。

言うか言うまいか悩んでいるように見えた。

数分にも渡る沈黙が続いたあと、彼女はようやく口を開いた。

「あなたは私を試そうとした」

私は驚いた。

いや驚いたなんてもんじゃない。

心臓が弾けたかと思った。

だが、占い師は怒るのではなく嘆くのもなく、静かにこう言った。

「しかし大切なのはそれではありません。言いくいことですが、あさつての夕方、あなたはこの世から消えるでしょう」

決断（前書き）

注意 後書きまでお読みください

決断

帰り道、私はユキに何を言われてもあいまいな返事しか返さなかった。

ユキには占いのことは話さなかった。

話しているものかどうかの判断がつけられなかったからだ。はじめは

「どうしたの、綾香？元氣ないよ」

なんて言ってたユキも、途中からは諦めて話しかけなくなった。

あさつての夕方。

つまりそれが本当なら、私は16年と5ヶ月ちよつとしかこの世に存在しないことになる。

それより問題はそのタイムリミットの短さだ。

いや、私は何を考えているんだろう。

占いなんて信じないのではなかったのか。

でも万が一ということもある。

あの占い師は私の心を読んだ。

話術などではなく、本当に。

そうすると私の命日も信じた方がいいのだろうか。

そうすると・・・。

私の脳みそはパンク寸前である。

いくら考えても同じところをぐるぐる回ってしまつ。

私は奇声すら発しかなないほど追い詰められていた。

「あさつての夕方以降、あなたのイメージがすつぱりと消えるの」

占い師は確かにそう言った。

私に死を宣告した直後のことだ。彼女の言うイメージとは、いわゆる「気」

のことらしい。

彼女いわく、彼女は未来を見るといふより、相談に来た人のイメージ ようするに気 を掴みとり、そこから時間軸を未来にずらすこ

とで、その人の未来を感じとるやり方なのだそうだ。

私にはとうていやれそうにはなかったが。とにかく私の

「気」

はあさつての夕方に途切れてしまうらしい。

すなわちそれは私が生命活動を終えることを意味するらしいのだ。

私は家に帰っても悩み続けた。

夕ご飯も食わず、お風呂にも入らず、睡眠もとらず考えに考えた。

そして、空がうつすらと明るくなるころ、一つの結論に至った。

私は友達を多く持つタイプではない。

ユキを含め、仲の良い友達は数人いるが、その他とはあまり喋らないし喋りたいとも思わなかった。

しかし最近はその均衡さえも崩れかかっていた。

はじめりは私と雪村貴子とのケンカだった。

雪村貴子は私と違って、女子に人気があり、グループのリーダー格で、冷酷な感じの人間だ。

ケンカの原因は忘れてしまうようなささいなことだったが、私はついカツとなってしまうた。

雪村は普段おとなしい私が猛烈な抵抗をみせたのが気に入らなかつたのか、その次の日から私に対するいじめが始まった。

私の数少ない友達は巻き添えを恐れて私から離れていった。ユキだけは例外で、

「いつも一緒だよ」

と言ってくれるのだが。

そして今は私とユキだけが完全に孤立している。

さらに私は親とも仲がよくなかった。

両親が一人っ子の私によせる期待に私は反抗したのだ。

勉強は放棄したし、髪も染めた。

さすがに夜中出歩く気にはならなかったが、両親との溝は十分に深く広がった。

朝、吐き気と頭痛とめまいを私は訴え、学校を休むことにした。もちろん仮病で、計画実行のためには時間が必要だったためだ。

昨夜考えぬいて思い付いた計画を実行する決心はついていた。

その計画とはずばり『自殺』である。

占いを信じて死ぬ予定の時間までびくびくしながら生きるのは嫌だ。そして自分の信じなかった占いが当たるのも許せない。

さらに私には失うものがない。ユキを除けば。

以上のことを見事に満たすのが自殺だったというわけだ。

今日は自殺のやり方を考えるのに必要な1日なのだ。

軽い朝食をとって、インターネットを使い、どう自殺するかを考える。

まず、電車で飛込むのは無理だ。

相当痛いらしい。

同じくリストカットもだめだ。

次に考えたのが睡眠薬だが、これは入手が大変だ。

首吊りは失禁とか恥ずかしい。

さあ、どうするか。

が、ここで、倫理の先生が言っていたことを思い出した。

飛び降りには、落ちながら気絶するから痛みを感じない。

私は、これだ！と思った。

そうと決めれば、場所を決めなくてはならない。

どうせなら絶景がいい。

しかし、これは簡単に思い付いた。

去年の遠足で山登りをしたときに、山の頂上から見渡した景色の中に、立派なU字型の谷があったのを覚えていたのだ。

あとは遺書を書くだけである。

私はその文章の中でユキにひたすらあやまった。

ユキは人に好かれやすいから、私がいなくなっても変わりなく暮らせるのかな、と思いながら。準備は整った。

決断（後書き）

注意 この小説に出てくる自殺についてのエピソードは事実と食い違つところがあるかもしれませんが。あくまで根拠のない噂です。決して真似をなさらないでください。

実行

携帯で時間を見た。

予定の12時は過ぎてしまっている。

どうしよう。

私は焦りがしだいに広がってゆくを感じた。

今日は死を宣告された日から2日後、つまり私の死亡予定日である。

朝から山に入ればあの谷に着くのは昼頃だろう、と予想していたが、まだその気配すら感じられない。

今歩いている細い山道は林に囲まれており、長い間誰も通らなかつたらしく、あたり一面の雑草で道を見失いそうだった。

私はもう一度時間を確認した。

さつきから10分しか経っていないが、確実に予定時刻は近づいていた。

夕方というのが何時何分なのかは分からない。

だが、私は占いが当たらないようにするために、なるべく早い時間に死ななければならなかった。

急に辺りの林が開けた。

そして、いつか遠くから見た谷が目の前に 距離にすると10メー

トルほど先に あった。

私はその距離を保ったまま立ち尽くした。絶景に見とれたのと足がすくんだものが半々だった。

私は持つてきた遺書を地面に置いた。

しかし風に飛ばされないか不安になった。

辺りを見回してみても重りになりそうな石はない。

そこで、私は靴を脱いで遺書の上に並べた。

なるほど、飛び降り自殺をする人が靴を脱ぐのはこんな意味もあるのか。

私はこれから死のうという時なのに新たな発見を嬉しく思った。

それから、私は目を閉じて深呼吸をした。

すると意外と簡単に足の震えは止まり、いつもどおり前に進めそうだった。

そこで私は名案を思い付いた。

このまま目を閉じて10メートルの距離を歩き、いつ落ちるかが分からず、あっ、と思ったときには死んでた、なんていうものだ。

私はそれを実行することにした。

暗闇の中、足を一步一步前に出す。

これが最後の一步になるかもしれない、と一歩ごとに覚悟するが、なかなか最後の一步はやってこない。

この感覚は何かに似ている。

苦手な数学で、先生が問題を一人ずつランダムに生徒に答えさせ、私は次か次かとヒヤヒヤしてる時のような、先生に見つかからないように誰かの噂やらが書かれた紙を授業中にみんなで回す時のような感覚だ。

ああ、私はもうあの学校には戻れないんだな……。

そのとき

私の右足が

空をきった。

「あつ」

体が右に傾いた。

考え事をしていたせいで心の準備ができていなかった。

私はあるうことが、落ちるのを知った瞬間、猛烈に後悔した。

幼稚園、ユキに初めて会った時のこと。

彼女はクラスにうまく溶け込めずいつも一人ぼっちだった。

私はそんなユキに声をかけ、彼女の本当の明るさを知った。

小学校の頃、男子にちょっかいを出されて泣いて帰った時のこと。

お母さんは私を笑わせて、なぐさめてくれた。

その男子が私を好きだったということはしばらくして知った。

中学校で友達とふざけて大怪我をした時のこと。

お父さんは知らせを聞いてすぐさま駆けつけると、事情も聞かずその友達にすごい剣幕で怒鳴り始めた。

俺の一人娘になんてことをしてくれる、と。

事情を聞いたら真つ赤な顔をして平謝りしてた。

そんな形相の父も真つ赤な顔の父も見るのは初めてだった。

高校生になってからのこと。

少ないながらも私の周りには友達がいて、いつもたわいもない事で笑ってた。

一瞬のうちにもいろいろな思い出が頭を巡った。

私が本当に謝らなければならなかったのは自分の両親だったのだ。

ユキにも手紙ではなく会って謝りたかった。

次の瞬間、闇が訪れた。

笑顔

今だからはっきりと言える。

あの日は私の命日である。ただし“それまでの”私の。

目を覚ますと太陽が真上にあつた。

幽霊になつたんだな。

私は寝転んだままガンガン痛む頭でそう確信した。

身体中が痛い。

幽霊でも痛みは感じるんだ。

私は想像していた幽霊との違いに少しがっかりした。

だってあまりにも人間的すぎる。

まるで人間のままであるかのように。

・・・まさか・・・。

私はガバツと上半身を起こした。

右を見る。地面がなかった。私の倒れてる位置から50センチぐらいのところまで地面が切れている。私は恐る恐る下を覗き込んだ。谷底は遙か遙か下に見えた。

なんのことはない、私が最初に見たのはだいぶ遠くからだつた。

だから、谷が見事なU字型に見えたのだ。

近くで見ると、その壁は、階段を縦に引き延ばしたようにいくつも段差があるのだった。

私が倒れているのはその一番上、飛び降りたところからわずか2メートルほど下にある足場だった。

私は落ちた衝撃で頭を打つたらしく、たんこぶができていた。

私はすぐさまその段差をよじ登り、靴を履いた。

遺書は握り潰して谷底に投げ捨ててやった。

家に帰るとお母さんとお父さんが玄關のところにおいて、私を見るやいなや駆け寄ってきて抱きしめてくれた。

どうやら誘拐でもされたのだと思ったらしい。

どんなに仲が悪くてもちゃんと心配してくれるなんて、やっぱり親はいてくれなくちゃ困る。

途中からは涙で両親の顔はぼんやりとしか見ることができなかった。

その後の私はそれまでの私と明らかに変わった。

ユキいわく、目つきが凜々しくなった、だとか、性格にトゲがなかった、だかららしい。

離れていった友達も自然と私の周りにいるようになった。

親ともうまくいってる。

大学も無事卒業し、今年からは私立の高校の先生になることも決まっている。

それまでの私には考えられない職業だと思う。

『大きく飛ぶためには一度かがむ必要がある』なんて、誰が言ったのかは分からないが、私もそのとおりだと思う。

実際、あの体験をしなれば、両親とは不仲のまま、友達とは疎遠なまま暮らしていただろう。

あの次の日、私は全ての始まりだった占い師の店をもう一度訪ねた。彼女は私の話を聞くと、たった一言

「おめでとっ」

と言った。彼女は全て知っていたのかもしれない。私が自殺しようとすることも、それが失敗に終わることも、新しい私が生まれることも。私がそれを言っていると、彼女は

「これでも占いを信じない？」
と言って笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0900a/>

私の命日

2010年10月28日09時28分発行